

Literature 主要文献

- 1874: F. Smith, Descriptions of new species of Formicidae of Japan,  
Trans. Entom. Soc. London, part 3, pp. 373-408.
- 1903: Bingham, Fauna of British India, Vol. 2, Hymenop. pp. 1.414.
- 1906: W. M. Wheeler, The Ants of Japan, Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., XXII, pp. 301-328.
- 1911: 矢野宗幹, 日本産トゲアリ属, 動物学雑誌, Vol. 23, No. 271, pp. 249-256.
- 1912: A. Forel, H. Sauter's Formosa Ausboute. Formicidae (Hym.)  
Ent. Mitteilungen, I, Nr. 2, pp. 45-80.
- 1912: C. Emery, Genera Insectorum (137) Formicidae, Dolichoderinae, pp. 1-50.
- 1914: T. Ito, Formicidarum Japonicarum Species Norae Vel minus Cognites.  
Anna. Soc. Entom. Belg. LVIII, p.
- 1917: K. Escherich, Die Ameise, pp. 332-333.
- 1918: J. Bondroit, Des Fourmis de France et De Belgique, Ann. Soc. ent Fr., LXXXVII,
- 1921-22: W. M. Wheeler, Key to the Genera and Subgenera of Ants.  
Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., XLV, pp. 631-710.
- 1921-22: C. Emery, Genera Insectorum, Fasc. 174, Formicidae, Myrmicinae.
- 1927: Donisthorpe. British Ants.
- 1928: W. M. Wheeler: Ants collected by Prof. F. Silvetri in Japan and Korea,

- Contribut. Ent. Labor. Bussey Instit.,  
Harvard University No. 289.
- 1929: 寺西暢, 日本産蟻類の習性と分布 (1) (2),  
動物学雑誌 Vol. 41, pp. 239-251, pp. 312-332.
- 1930: F. Santschi, Trois notes Myrmecologiques,  
Bull. Ann. Soc. Ent. Belg., LXX, pp. 263-270.
- 1930: 寺西暢, 日本旧北区の蟻(第一報),  
関西昆虫学会々報 No. 1, pp. 17-26.
- 1932: 矢野宗幹, 日本昆虫図鑑, pp. 328-340.
- 1933: 寺西暢, 日本産蟻類の習性と分布 (3)  
関西昆虫学会会報, No. 4, pp. 84-85.
- 1934: 寺西暢, ツノアカヤマアリ及其近似種の分布に就いて, 関西昆虫雑誌, Vol. 2, No. 2, pp. 5-7.
- 1935: 寺西暢, ノコギリハリアリに就いて, 関西昆虫雑誌, Vol. 2, No. 2, pp. 11-12.
- 1937: F. Santschi, Fourmis du Japon et de Formose.
- 1940: 寺西暢, 未発表遺稿,
- 1941: F. Santschi, Quelques fourmis Japonaises Inedites. Mitteil. Schweiz. Entom. Gesells., Bd. 18, Hef. 4-5, pp. 273-279.
- 1944: 寺西暢, 日本産二節蟻亜科に就きて, (昭和九年東京農大卒業論文)
- 1949: 東正雄, 和歌山県友ヶ島の蟻相に就いて, 兵庫生物, No. 4, pp. 34-37.
- 1949: William L. Brown, Revision of the Ant Tribe Daecini. Fauna of Japan, China and Taiwan, Mushi, Vol. 29, pars. 1, pp. 1-25.
- 1950: 東正雄, ムネアカオオアリについて, 昆虫学評論, Vol. 5, No. 1, pp. 47-48

縣下に於ける蝶類の採集地に就いて……………(1)

山 本 広 一

私が昆虫採集に手を初めたのはたしか大正十二年の春だつた。最初の頃はどんな種類でもおかまいなく集めて居たが、年と共に段々とその範囲が狭まつて、最近ではとうとう蝶や蛾に局限されてしまつた。結局時間と労力とが到底広範囲に亘ることを許さなかつた故でもあるが、やはり蝶や蛾のもつ美麗な姿に魅せられた為でもあろう。

以来凡そ30年、随分方々を歩きまわつた。勿論その間には種々の事情で殆んど中止の状態に陥らざるを得なかつた戦時中の幾年かがあつたけれども、出来るだけ広く採集に出るよりにと努めた。その為本県下ではお膝下だけに可なり巡ることが出来た。面白い採集地に出会つたこともあるし、変つた種類を探し出して喜んだこともある。旅行中切符の制限で帰宅することも出来ず宿なし猫の憂目に会つた

ことも再三あるし、中途で食糧の自由に買えないために一昼夜も米位にありつけず空腹に堪えねばならぬこともあつた。今私の標本室に入つて標本をながめていると、それらの一つ一つがすぎとし方の喜びや悲しみを呼び覚めてくれ、ひそかに一種の満足を与えてくれるのである。

私は県下で面白かつたと考える採集地について今後少しく記してみたく思う。六甲、有馬、唐櫃、妙法寺、須磨といった神戸附近や西宮、宝塚といった阪神間の地方は多くの人々によつて幾回となく採集され、且又その結果が報告されているので、こうした Fauna の比較的明瞭な場所についてはなるべく簡単にして、その他の余り世に知られていない地方即ち中播、西播、但馬といった方面のことについて述べることにする。そうした地方には、本県では未だ

報告されていない——居るだろうと予想はされたかも知れないが——種類も少くないので、或は今後採集を試みられる方々への参考ともなろうし、又蝶の分布を研究なさる方々への資料ともなれば私として非常に幸と思うからである。

### 1. 印南郡城山

城山は印南郡東志方村に属し、その東部に聳える山で、標高271.6米、加古川線日岡、神野あたりからも、小野町あたりからも見え、山陽本線宝殿辺からも遠望される。山の上が一段と高く平坦となつて、名の如くいかにも古城の跡を想像させる。こゝは曾て三木城主(県下美濃郡)別所長治の出城として、赤松氏の陣を構えたところ、天正九年豊臣氏の攻めに遇つて城は灰燼と歸した。「赤松城跡」の碑石がありし日の昔を伝えている。以来幾星霜、行楽の地として多くの松樹が移植され、掛茶屋、見晴台の設備さえ出来たのであるが、今は全く荒蕪その極に達し、松樹は中途より伐倒され、鬱蒼と繁茂していた雑樹はすっかり伐採されて、全く一物留めぬ丸裸となつてしまつた。芝草の上に散乱するキャラメルの包紙や、弁当の空箱を見ては、そぞろに栄枯盛衰荒城のはかなさを懐うのである。

扱て山はすべて松樹であり、僅かに谷間の諸々に潤葉樹の散在する状態であつたから、蝶の種類は必ずしも豊かではないが、早春には山頂の合地辺にギフチョウ(*Luedorfia japonica* Leech)が居るし、六月中旬には中腹でホシミスジ(*Neptis pryri* Butl.)が採集出来る。

私がこの地にギフチョウが産することを知つたのは1931年に既に二管となるが天気の良い風の穏かな日には相当得られたものである。最近では減少したが、本年(1950)登つてみると頂上には見受られなかつたが、登山路で見ることが出来、やはり余息を残しているものと嬉しく感じた。

ホシミスジは160米位から上の方に多く、以下では従来2~3回見たに過ぎない。160~170米位が最も豊富で群飛している。普通のホシミスジは寧ろ稀な位で、容易に捕獲出来る。地続きの山腹にも居るが、何としてもとこが最も著しい。本種は六甲、須磨灘官道辺で採集されているが、本県下では他に産することを聞かない。又この地方でもこの他では採集し得ない。食草はゴゴメバナ等のシモツク科の植物である。

台地には春色々なアゲハが集つてくる。アゲハチョウ(*Papilio xuthus xuthulus* Bremer) キアゲハ(*Papilio machaon* Linne) クロアゲハ(*Papilio protenor demetrius* Cromer) が飛んでいる。附近には少いキアゲハが沢山飛んでいるような場面に出会うと実際に心躍るの思がする。

殊にモンキアゲハ(*Papilio helenus nicconicolens* Butler)が居るのは喜ばしい。唯一回の経験だが、後翅に黄白の紋を現わして、のしていく黒色の姿は心にくい。急峻

なところとて遂に捕獲出来なかつたが、当時の印象は今尚私の脳裡に明瞭に焼きつけられている。モンキアゲハは隣接の加東郡下でも一頭採れたことを聞いているし、僅か乍ら発見されている。とにかく私が県下で知る多くの産地の一として報告しておく。

ヒョウモン類(*Argynnis*)はクモガタヒョウモン(*Argynnis anadyomene* Felder)が最も多い。私の採集が6月頃に偏しているためだろうがメスグロヒョウモン(*A. sagana* Doubleday) オオウラギンヒョウモン(*A. nerippe* Felder)等と共に溪流に咲くウツギの花に集つてくる。ミドリシジミの類(*Zephyrus*)は樹相の関係で、山では少いが、オオミドリシジミ(*Z. orientalis* Murray)は容易に採集できるし、麓の雑木林にはミズイロオナガシジミ(*Z. attilia* Brem et Gray) アカシジミ(*Z. lutea* Hewitson)其他が居る。

山麓には珍しいヒメヒカゲ(*Coenonympha oedippus annulifer* Butler)が多く、ヒメウラナミジャノメに混じてウラナミジャノメ(*Ypthima motschulskyi* Bremet Gray)も居る。ヒメヒカゲは6月10日前後よりこの附近一帯に豊産し、それを目的の採集なら1日に100や200は決して難事ではない。

### 2. 加東郡瀧野町五峯山

通常光明寺山といい、加古川瀧野駅の直ぐ北西に聳える山で、山頂に推古天皇の御宇法道仙人の開基と伝うる光明寺がある。今、大慈院他三箇寺、慈覚大師の請来に係る一軸の善導大師の尊像を安置して凡そ一千百年に及ぶ。太平記に記す光明寺合戦の古跡、その三本杉は寺域の中程に存する。海拔約230米。寺の附近を除いては全山松樹林であるが、今は大部分が伐採されている。従つて昆虫相については特記すべきものもないが、私が初めてギフチョウを採集した所として、特に印象が深い。曾てク岐卓蝶々の名に暗示されて、わざわざ岐阜の金華山辺まで出かけ、季節の関係で得られなかつた当時の珍種が、燈台下暗く、反つてこうした近くで多数に獲られことを知つた時のよろこびは非常に大きいものだつた。それは1928年4月13日のことで、その日は折悪しく何の用意もしていなかつたので、早速翌日登つて採集したのが、数頭私のキャビネットに収つている(April 14, 1929)。その後四月が来れば殆んど毎年一回位は登山して採集することにしている。現在では全国的に広く産地が判明しているが、当時その由を発表していたら、必ず六甲、高尾山等と肩をならべて有名な土地となつていたことであろう。県下では六甲山と三木町とが知られているが、この附近ならどこにでも居る。私の知り得た郡下の産地に就ては、当学会の小野支部報「*Viola*」No. 2. (1949)に記録しておいたが、更に本年(1950)加東、美濃境に近い脇本新田にても採集し、数は少い乍ら広く分布している。

五峯山に於けるギフチョウはマルバカンアオイに産卵し、それを食する。寺の南の一段高まつたところは見晴しもきき、日当たりもよいので、採集に最も好適である。快晴の午前中ここに陣取れば、次々と現われるので労少くして能率をあげ得る。更に山の南の谷にも採集出来、つと距つた人家の辺でも見受ける。1930年には加古川の飛船の名勝として知られた園籠灘の旅館の前で得たし、更に妻畑の中を通る県道上にても採集した。最近1948市場小学校の校庭でも得るといつたように飛翔力の弱そうに見える本種

が、山地より距つたところで得られることは面白い。太陽の日射しの土の上に翅を展げて憩うことが多く、時にはツツジの花に、アブラナの花に集ることがあるが、採集は容易である。

其他寺の境内で地上に憩うコツバメ (Satsuma ferrea Butler) を多数に得た例もあるし(1929年)、昨年(1949年)には珍らしくもスジグロシロチョウ (Pieris melete Mene) が多数山麓で採集された。

## 淡路島の暖地性植物、寒地性植物、其の他

河 野 好 博

淡路島で、来年採集会をしようとする話が出ているので、淡路島に産する植物の中から、暖地性植物並に寒地性植物、其の他分布上注目すべきもの、稀なもの等を抜き出してみる。多少なりとも御参考になれば幸である。

暖は暖地性植物を、寒は寒地性植物を、他は其の他のものを表す。○印のものは初めて発表するものである。

なお私は、北村、田川阿博士其の他の先生方の御指導により、淡路島の植物についてしらべているが、淡路では、松沢先生始め先輩の方々がお力なされたことと、同志の方が御協力下さつておられることを付記して、之等の方々へ敬意を表す。

### キク科

暖一テイシヨウソウ 柏原山、諭鶴羽山。ノヂギク 三熊山、鮎原、富島。アブラギク 鮎原、広石。ハマアザミ 灘。アゼトウナ 上灘、沼島。ハンカイソウ 三熊山、仁井、野島。ハマグルマ、筒飯野浜、吹上浜。

寒一カセンソウ 育波、神代。○ホシナシヒヨドリ 三熊山、鮎原。

他一○フクドヨモギ 松帆三原川河口。○マヤサンコンギク 猪ノ鼻。○ヨシノアザミ 鮎原。キクアザミ 仁井。○ホンバノミツバヒヨドリ 鮎原。

### キキョウ科

暖一ヒナギキョウ 普通。

### スイカヅラ科

寒一ゴマギ 猪ノ鼻

他一○アラゲガマズミ 柏原山。

### アカネ科

暖一アリドウシ 三熊山、津井、上灘、沼島。クチシナ 普通。カギカヅラ 猪ノ鼻。ルリミノキ 上灘。

他一○オニフタバムグラ 筒飯野。○ハシカグサ 柏原山。

### ハエドクソウ科

他一ハエドクソウ 三熊山。

### タヌキモ科

暖一コタヌキモ 鮎原、加茂。

### ハマウツボ科

他一ナンバンギセル 中川原、三熊山、千草、沼島。ハマウツボ 安乎、江井、吹上浜。

### ゴマノハグサ科

寒一ウラン 浅野、郡家、郡志、筒飯野浜、吹上浜。

### ナスビ科

暖一メジロホウヅキ 灘、上灘。

### クチビルバナ科

寒一○カワミドリ 猪ノ鼻。ヒキオコシ 鮎原、富島。

他一ラショウモンカツラ 猪ノ鼻。

### クマツヅラ科

暖一ハクサギ 千草。コムラサキ 先山。

### ガガイモ科

暖一キジョラン 猪ノ鼻。

### キョウチクトウ科

暖一サカキカツラ 三熊山、先山、猪ノ鼻、煙島。

### フジウツギ科

暖一ホウライカツラ 猪ノ鼻。

### ハイノキ科

暖一カンザブノウキ 広鮎田屋。

### カキ科

暖一トキワガキ 灘。

### イソマツ科

暖一ハマサジ 筒飯野浜。

### サクランウ科

暖一ハマボツス 普通。

### ヤブコウジ科